SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

学校教員養成課程における教科連携による授業実践の試み no.2：美術科と家庭科の学生が考える教科充実に関する特徴とその顕在化

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2011-06-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村上, 陽子, 髙橋, 智子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00005696

学校教員養成課程における教科連携による授業実践の試み no.2

―美術科と家庭科の学生が考える教科充実に関する特徴とその顕在化―

A Trial of Teaching by the Cooperation of the School Subject in the Teacher Training Course

村　上　陽　子・髙　橋　智　子
Yoko MURAKAMI and Tomoko TAKAHASHI

（平成22年10月６日受理）

1. はじめに

近年，各教科間で連携した授業づくりが求められている。2008年に告示された小学校学習指導要領の第１章総則「指導計画の作成等にあたって配慮すべき事項」では，「各教科等及び各学年相互間の関連を図り，系統的，発展的な指導ができるようにすること。」「児童の実態等を考慮し，指導の効果を高めるため，合科的・関連的な指導を進めること。」「各教科等の指導に当たっては，児童が学習内容を確実に身に付けることができるよう，（中略）教師間の協力的な指導など指導方法や指導体制を工夫改善し，個に応じた指導の充実を図ること。」が示され[1]，中学校学習指導要領第１章総則「指導計画の作成等にあたって配慮すべき事項」では，「各教科等及び各学年相互間の関連を図り，系統的，発展的な指導ができるようにすること。」「各教科等の指導に当たっては，生徒が学習内容を確実に身に付けることができるよう，学校や生徒の実態に応じ，（中略）教師間の協力的な指導など指導方法や指導体制を工夫改善し，個に応じた指導の充実を図ること。」と示されている[2]。しかし，実際には小・中学校において教科間の連携はほとんど行われていないのが現状である[3]。美術科と家庭科においても，同じことがいえる。大学のカリキュラムにおいても，教科連携を視野にいれた授業実践はほとんど実施されていない。

本研究では，大学の学校教員養成課程における教科連携のモデルケースを示し，連携による学習効果の向上の一助とする。本研究の流れは，①教員を目指す学生に対する意識調査，②連携モデルの提示，③連携モデルの実践，④実践後の評価となっている。昨年度，中学校「美術」および中学校「家庭」免許取得をめざす学生を対象にアンケート調査を実施し，その結果を報告した。この報告[4]では，両教科の特徴や違いなどの傾向を示した。本研究はその継続研究であり，さらに2年間のデータを追加することで，両教科の特徴をより顕在化させていくことを目的とする。これを基に，教科連携の充実のために必要な力を明確化していく。

2. 方法

調査時期は2008年から2010年である。調査対象は，静岡大学教育学部の美術科専修生の1年（51人）及び3年（48人），家庭科専修生の1年（48人）および3年（41人）である。調査は，質問紙留置法で行った。回収率は美術科80.8％，家庭科97.8％であった。調査内容として，属性に関する項目，将来の進路に関する項目，教科に対する意識に関する項目について調査した。

3. 結果および考察

調査対象の属性であるが，美術科専修生（以下，美術科と記す）は1年が男子9人，女子31人であり，3年は男子7人，女子33人であった。家庭科専修生（以下，家庭科と記す）は1年・3年共に全員女子であった。

(1) 進路について

今回のアンケート調査において，まず全員に将来の進路についての設問を設けた。美術科の結果を図1に，家庭科の結果を図2に示す。

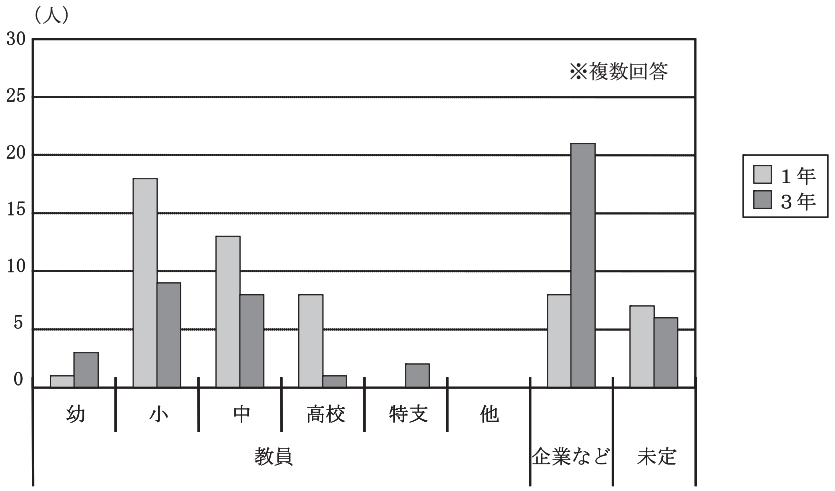

図１　将来の進路（美術科１年、３年）

（１年40人、３年40人が回答）

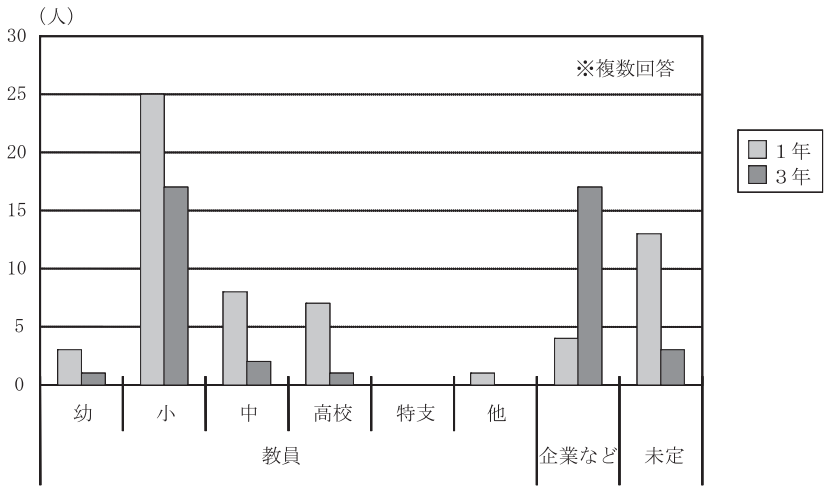

図２　将来の進路（家庭科１年、３年）

（１年48人、３年39人が回答）

1年において，美術科では教員志望の学生は40人おり，企業および未定の学生は15人いた。家庭科では，教員志望の学生は44人おり，企業および未定の学生は17人であった。3年において，

美術科では教員志望の学生は23人おり，企業および未定の学生は27人いた。家庭科では，教員志望の学生は21人おり，企業および未定の学生は20人であった。

両教科を比較すると，学年毎の教員志望の割合がほぼ同程度であり，学年が上がるにつれて教員志望の学生が減少する傾向にあることが分かる。つまり，両教科の進路希望の動向は類似しているといえよう。しかし，詳しく内訳をみていくと，両教科で顕著な相違が見られた。中学校教員の志望率に注目すると，美術科1年では全体の32.5%，3年でも20.0%を示していた。それに対し，家庭科1年では16.7%，3年になると5.1%と著しい低下が見られた。小学校の教員志望に注目すると，美術科1年では45.0%，3年では22.5%であった。家庭科1年では52.1%，3年では43.6%を示した。この結果から，家庭科の学生の特徴は，教科の専門性が要求される中学校教員よりも小学校教員を志望する傾向にあるといえる。逆に，美術科の学生の特徴は，小学校教員よりも，より教科の専門性を追求できる中学校教員を志望する傾向にあることが分かる。

また，教員以外と回答した学生は，美術科1年では全体の20.0%，3年では52.5%，家庭科1年は8.3%，3年では43.6%であった。両教科を比較すると，教員以外を志望する学生の割合に大きな差異は見られないが，その内訳に注目すると，美術科では「お絵かき教室の先生」「印刷デザイン会社」「デザイナー」「企業デザイナー」「パッケージデザイン，ブックデザイン」「陶芸教室」など，教科と関連性のある職種を希望している学生が多く，家庭科では，教科と関連性のある職種を希望している学生は，1名のみであった（食品関係）。

前回の報告においては，両教科を比較すると，美術科は1・3年を通じて教員を志望する学生が半数近くを占めるが，家庭科は学年が上がるにつれて企業を志望する学生が増加し，教員を志望しない傾向にあるといえた。しかし，3年間の調査を踏襲すると，両教科において，教員を志望する学生や教員以外を志望する学生の割合は，類似している傾向にあった。また，前回の報告において，美術科では「その他」と回答する学生が1・3年を通して最も多く，専門性を活かした職業に就きたいという思いから，教員に限らず進路について様々な可能性を追及しながら悩んでいる学生が多いことが示されていた。家庭科においては，教科の専門性を活かした進路を選んでいる美術科とは対照的な結果となっていた。この内訳は，今回の調査でも前回の調査と同様の傾向にあった。また今回，学生が志望している校種に着目してみたところ，美術科では専門性を追求できる中学校教員を志望している学生が多いのに対し，家庭科ではその割合が低かった。これは前回の調査と同じ傾向にある。つまり，教員を志望する学生においても，教員以外を志望する学生においても，美術科では専門性を活かせるかどうかを重視しているが，家庭科では重視していない傾向にある。これが進路希望における教科の特徴であるといえよう。

(2) 教科充実のために教員に求められる資質

次に，教員に求められる資質をどのように認識しているかを図るために，「中学校の教科担当として，教科の充実を図るために教員はどのような工夫をしたらいいと思いますか」という設問に対し，自由記述で回答してもらった。前回同様，自由記述の分析を行ったところ，学生が教科充実のために求める子ども像とその方法が回答されていた。それを分類したものが，表1～表4である。さらに，その項目をカテゴリー別に分類したものが図3（1年）と図4（3年）である。前回の報告では，「教材」「授業」「連携」「生徒」「他者との関係」「教員自身の努力」の6つのカテゴリーに分類していた。今回は，この分類をより精査し，授業実践に関わる「内容」「方法」「過程」「評価」の項目を新たに設けた[5]。「他者との関係」のカテゴリーについては，その内容

を他のカテゴリー内に振り分けることができたため，今回の報告では削除した。さらに今回，新たな試みとして図5のチャートを作成した。これは,図3および図4をレーダーチャート化したものである。このチャートを利用することで，各教科および学年毎に学生が教科充実に求めている内容の特徴やその傾向を簡単に相互比較することができるようになった。

表１　教科充実に求められる工夫（美術科、2009年度）

美術科１年		美術科３年	
求める子ども像	方法	求める子ども像	方法
	・教材研究		・教材研究 ・導入の工夫 ・生徒の実態把握 ・授業展開の工夫 ・教員の知識向上
	・作品の提示 ・様々な領域を行う		・学習指導要領の研究
・一人ひとりにあった表現方法を見つけさせる ・自己表現のおもしろさに気付かせる ・自分自身は何者かを考えさせる ・「周囲とかかわりながらも常に続ける姿勢」を磨く	・教員の美術に対する関心、知識、技術などの向上 ・様々な領域を行う ・ものづくりを行う ・有名作家の鑑賞授業 ・友達の作品を鑑賞し、その思いに気付かせる ・自分の趣向に気付かせる ・模写 ・フィールドワークを取り入れる		・作業に集中できる工夫 （的確な指示の出し方など） ・資料の工夫 （大きさ、枚数、色、提示方法）
・興味関心をわかせる	・教員の美術に対する作家、作品、技法などの知識の獲得 ・生徒の質問への適格な対応 ・魅力的な手本の提示 ・鑑賞活動の充実（ビデオ、PPの活用、および、作品集の提示ならびに壁への掲示の工夫）		・情報収集 ・知見を深める
・生徒に美術の楽しみを理解させる	・表現の導入 ・表現に加えた講議の導入 ・課題としてクロッキーを出す	・生徒が楽しみ、印象に残る	・発問の工夫 ・達成感を感じさせる （「できた」「わかった」）
	・他学校の教員との情報交換		・教材研究 ・身近な教材の選択（具体例あり）
			・教材研究 ・他教員との研究会 ・実態把握 ・実態にあわせた教材づくり
			・教材研究 ・生徒理解
			・目的の明確化 ・活動中心 ・学年の繋がりを意識する ・他教員との連携 ・校内展示の工夫 ・声かけの工夫 ・動機づけ ・生徒の実態にあわせた教材提案
		・生徒が興味をもち、自由な発想をする	・目的の明確化 ・具体的に美術のよいところを伝える ・自由に思いきった作品が作れるような授業展開
		・生徒の美術に対する関心を高めるだけでなく、地域に親しみをもつきっかけになる	・本物を見る ・地域の美術館と連携
		・生徒の美術に対する関心を高めるだけでなく、地域に親しみをもつきっかけになる	・他教科との連携 ・他校との交流 （教員同士、子どもの作品交流など） ・幅広く専門性を高める ・教科を越えた新しい分野、方法の開拓（NPOの活動など）

表２　教科充実に求められる工夫（家庭科、2009年度）

家庭科１年		家庭科3年	
求める子ども像	方法	求める子ども像	方法
・教科を好きになる	・対話		・体験的活動の充実 ・生徒に発言させる ・企業や地域の方々との連携
	・実習や実験の導入 ・クラスの人と話し合う機会を取り入れる ・黒板や教材プリントの工夫（絵や図など） ・ゲームやクイズを取り入れる	・生徒が関心をもつ	・教材の工夫 ・導入の工夫 ・体験学習を取り入れる ・けじめをつける
・家庭科の意義を理解させる	・興味・理解しやすい授業		・実態にあった教材の選択 ・五感（視覚、聴覚など）に訴えかける教材の準備 ・年間の導入授業の工夫（家庭科の授業の意義づけ） ・グループ活動や考える時間の導入
・生きる力を身につける	・実習の導入		・生徒の実態把握（アンケートなど） ・導入の工夫（新聞や流行のものなど） ・実習や実験の導入 ・グループワークの導入 ・大学との連携（専門的知識の獲得） ・地域の人々との連携
	・実習の導入 ・教具の工夫（実物人形） ・生活に役立つ知識の提示		・年間指導計画を意識した他教科との連携 ・教材の充実 ・設備の充実 ・電子機器の活用
	・実験の導入 ・図や表、グラフの活用 ・生活に密着した教材の導入	・生徒が興味関心をもつ	・教材研究 ・他教科との連携
・家庭科の意義を理解させる	・実習の導入	・将来学んだことを生活に活かす	・計画的な授業運営 ・体験学習の導入（五感を使った授業） ・身近な話題の活用 ・発見、気づき、再認識、新たな疑問に繋がるようにする ・将来役立つような内容・過程の工夫 ・用具、材料、機器等の準備 ・他教科との連携
	・実習（裁縫、調理）の導入 ・絵や写真の多い教科書の採用		・新鮮な教材の提示 ・地域の人との連携 ・体験の導入 ・分かりやすい授業の展開（資料やスクリーンなどの活用）
	・実習の導入 ・ワークシート（書き込み型）の工夫		・設備の充実 ・全員が作業できる教材の工夫 ・計画、体験学習、復習、定着を図る ・導入の工夫（音やパソコンなど）
・将来、使えるような技術を身に付けさせる	・実習の導入（調理、裁縫）		・わかりやすい教材をつくる ・３年間を通した授業計画 ・教員間の連携 ・備品の充実
	・実践的な授業 ・覚えさせる授業		・楽しく分かりやすい授業 ・作業学習の導入 ・地域の人との連携
	・教員の知識向上 ・発問の工夫 ・的確な指示・助言		
	・導入部分の工夫（小テスト、復習）		
	・実物の提示 ・実演		
・生徒が興味をもつ ・将来学んだことが活用できる	・実習の導入（調理、裁縫、保育）		
	・分かりやすい授業展開（図、調べ学習） ・子ども達との交流を深める		
	・実習、実験の導入		

表３　教科充実に求められる工夫（美術科、2010年度）

美術科１年		美術科３年	
求める子ども像	方法	求める子ども像	方法
・生徒が興味をもつ	・教材研究 ・最新の情報の精通 ・様々な領域にチャレンジする ・自分がよいと思えるものを使う		・生徒の実態把握と、それに伴う教材提示 ・教材研究
	・授業内容の工夫（アドバイスの仕方、声の掛け方、ほめ方） ・教室の雰囲気づくり	・作品の良さ、美術の素晴らしさを伝える	・自ら美術作品を見る機会をもつ ・目標の明確化 ・教材研究 ・生徒理解
	・教員の自教科の知識の向上 ・他教科の知識の獲得 ・他教科との関連をもたせた授業展開（子供達の学習に幅が出るため）		・美術館へ足を運ぶ ・自分が制作をする ・適格な教材の選択
	・様々な領域に挑戦	・意欲を重視し、知識や技法、美術のよさを味わう ・生徒の価値観、世界観を広める	・幅広い領域を学ぶ ・外部講師の招致 ・体験的な活動の導入
・生徒に興味をもたせる	・教材および道具の種類の充実 ・教科内容の充実		・教材研究
	・生徒が興味をもつ教材の設定	・生徒が興味をもつ	・教材研究 ・様々な領域を幅広く扱う ・地域の人との交流
	・題材に身近なこととの関連をもたせる ・学ぶ意識をもたず、自然に知識が身に付くような授業		・技術的な指導に偏らない指導（鑑賞の導入） ・他学校の美術教員との協力と意見交換
・生徒の苦手意識をなくす	・授業目的の明確化（文字で示す）		・教材研究 ・教材について考えて、実践と反省を繰り返す
	・様々な領域を取り扱う ・生徒の実態にあった教材選び	・美術を身近な存在としてとらえる	・教材を多角的な視点で捉える
	・楽しく作品づくりができる場を作る ・自分で制作した手本の提示 ・制作中のアドバイス ・わくわくするような教材の提供	・生徒の興味関心を高める	・博物館との連携
	・副免の取得	・生徒が美術を楽しむ	・教員に広い知識と話術と生徒に向き合う姿勢
	・学校の場を生かした教材（大掛かりな教材）		・生徒の実態把握（コミュニケーションをとる） ・専門性を高める
	・生徒の実態の把握 ・情報機器の活用 ・野外での制作活動		

表４　教科充実に求められる工夫（家庭科、2010年度）

家庭科１年		家庭科３年	
求める子ども像	方法	求める子ども像	方法
・教科に興味をもつ	・教材研究 ・生徒の実態把握		・３年間の授業計画の工夫 （目標の明確化）
	・伝え方の工夫（図、身ぶり）		・教員の知識向上 ・身近なことから教材を作成する
	・実習の導入 ・身近な話題の活用		・社会経験を積む
	・教員の知識向上、体験・実践蓄積 ・実習の導入 ・実体験の活用 ・受動的でなく参加型の授業を心掛ける	・生徒が生活に活かす ・苦手意識をなくす	・実習の導入 ・身近な生活と関連づける ・面白い教材開発
	・領域（衣食住）の系統性をもたせる		・生徒の実態把握
・授業で得た内容を自分の生活に活かせる	・身近な話題の活用		・他教科との連携 ・活動をたくさん入れる ・教材研究
	・興味をもつような実験や体験を増やす ・話し方の工夫		・小学校との連携
	・興味をもつような授業の展開		・生徒の実態把握 ・生活に密着した授業展開
	・学年（小・中・高）の系統性をもたせる（子ども達の実態を見通した授業の展開）		・資料の準備
	・興味をもたせる授業 ・実習の導入	・生徒が興味をもつ	・実物の準備 ・データを適宜提供
	・グループ活動、実演、実験の導入		・他教科との連携 ・授業展開の工夫 ・実習を出来る限り多く行う ・子どもたちにとって身近なものと関連づける
・興味・関心をもつ	・教員の知識向上 ・授業の計画性 ・教科の楽しさや重要性の認識を深める	・生活に活かせる技術の獲得	・実習の導入 ・教材同士の関連性（１年単位）
	・ものづくり（調理実習、裁縫）を体験させる ・教科の特性を理解して、そこに問題意識をもって授業する	・生徒が興味をもつ	・実験・実習の導入 ・複数分野を組み合わせる内容
	・教科だけでなく広い知識をもつ ・社会や日常生活、他教科と関連させる ・多角的な視点を身につけて、他の人と意見をかわす		・調理実習や実験を導入 ・考え、参加する授業 ・身近な生活と結び付けさせた内容・方法
	・グループワークの導入		

①教科共通の傾向

まず，教科充実のために必要な方法の項目数に着目する。前回の報告では，得られた項目数の平均を算出すると，美術科1年では2. 13項目/人，3年では3. 67項目/人であり，家庭科1年では2. 07項目/人，3年では3. 18項目/人であった。このデータから，3年に関しては，1年より具体的な方法について挙げている項目数が多く，教科充実のための多角的な視点を持っていることが考察された。今回，3年間の調査で得られた項目数（表1～4参照）の平均を算出すると，美術科1年では2. 58項目/人，3年では3. 20項目/人であり，家庭科1年では2. 10項目/人，3年では3. 41項目/人であった。1年と3年の教科充実のために必要な方法の項目数は,前回と同様の傾向が示された。授業づくりに対し，1年は視野が狭く部分的に捉えているのに対し，3年は広い視野から俯瞰的に捉えているといえる。

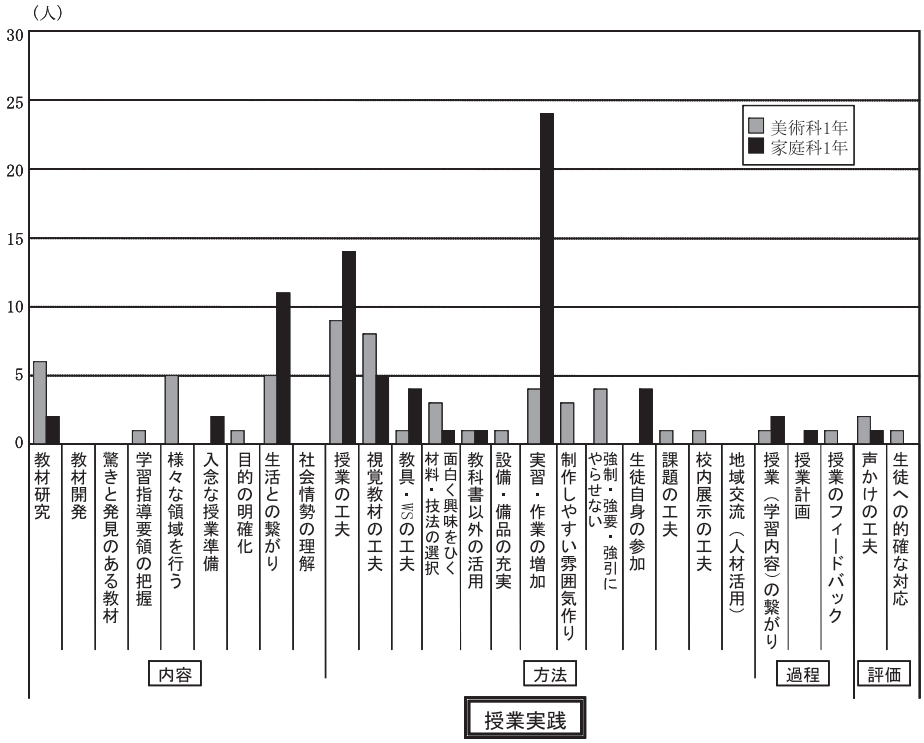

図３-a.　教科充実に求められる工夫（授業実践）

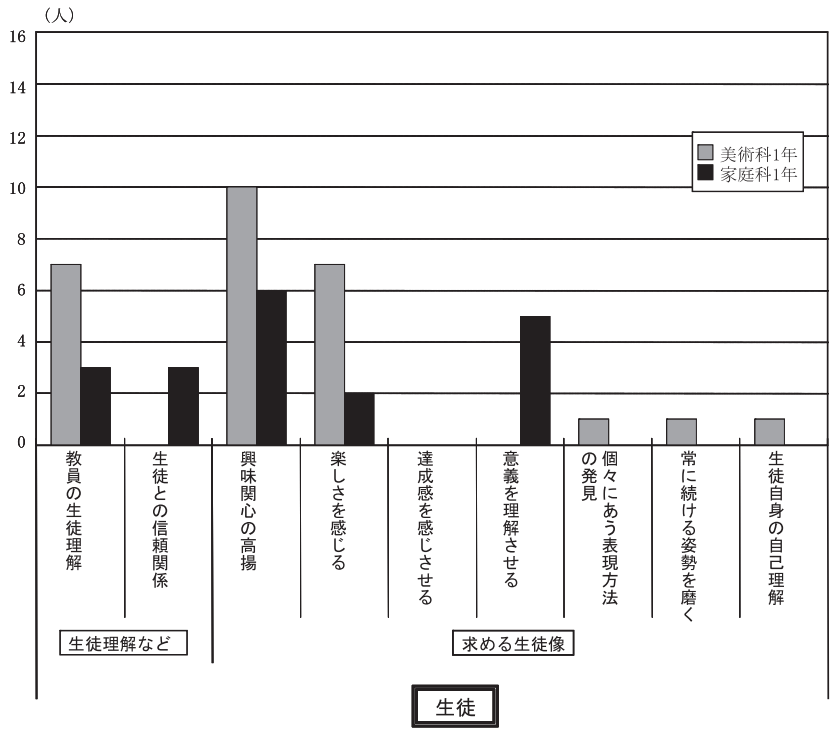

図３-b.　教科充実に求められる工夫（生徒）

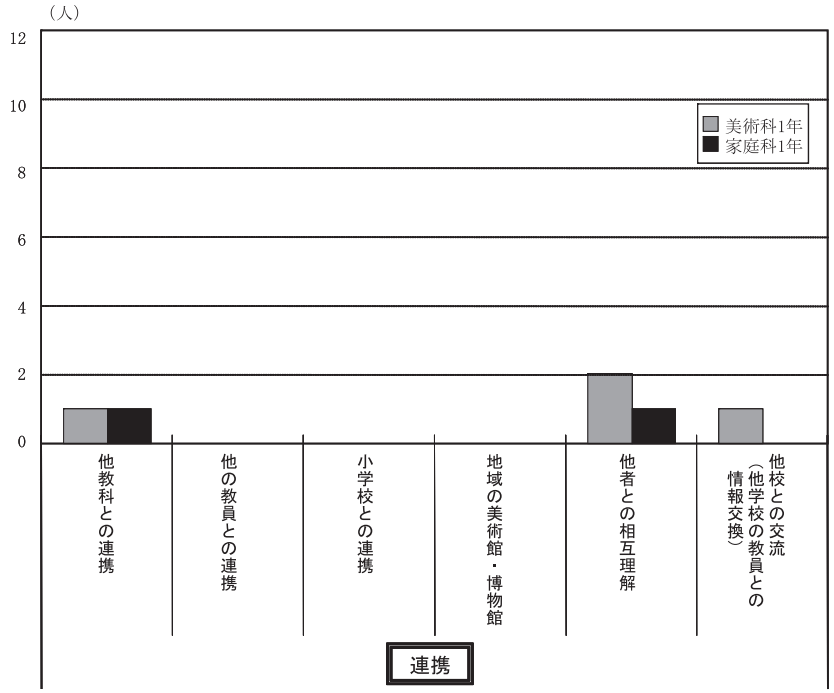

図３-c. 教科充実に求められる工夫（連携）

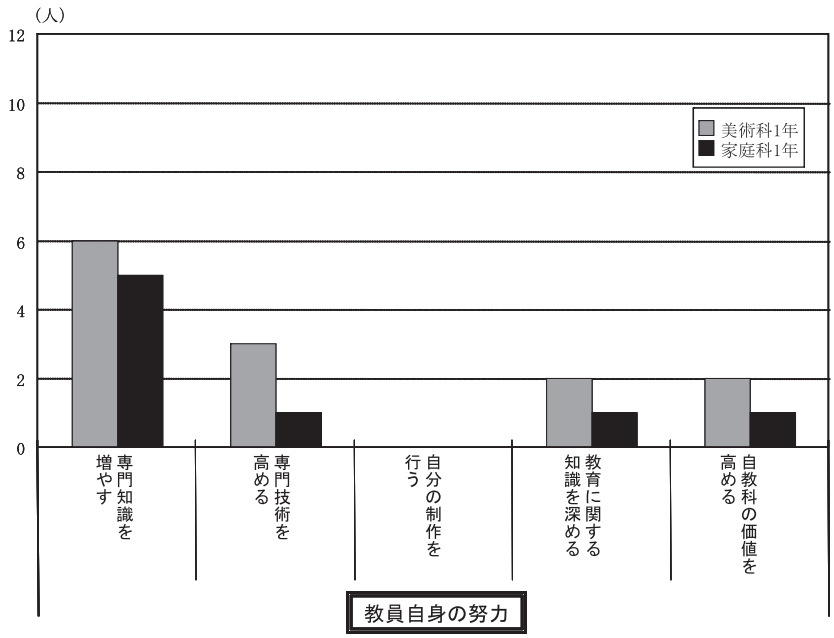

図３-d. 教科充実に求められる工夫（教員自身の努力）

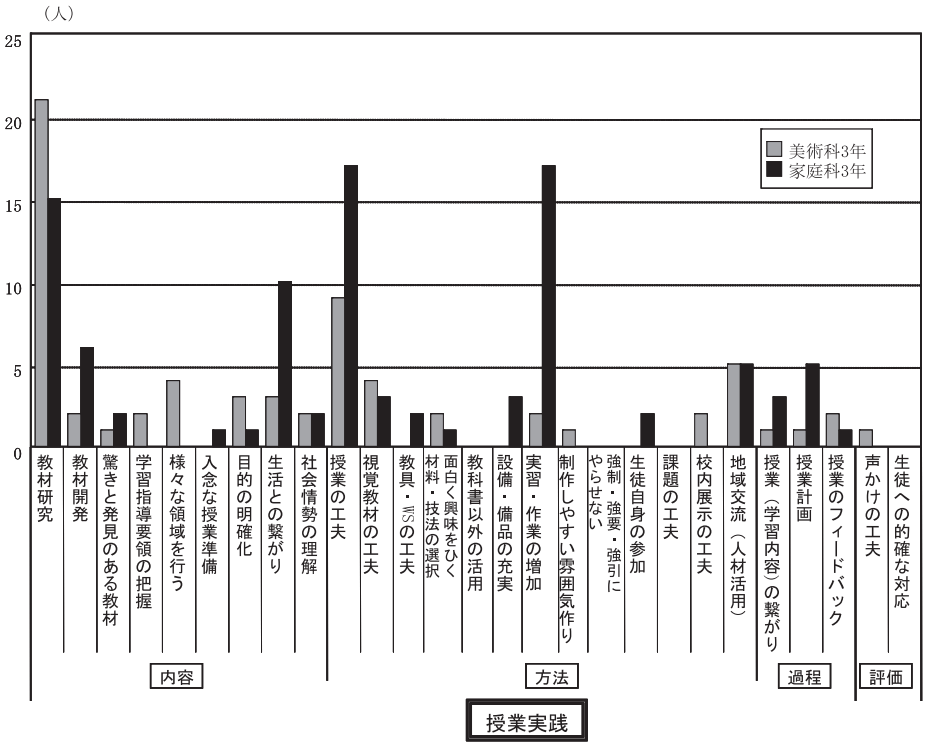

図４-a. 教科充実に求められる工夫（授業実践）

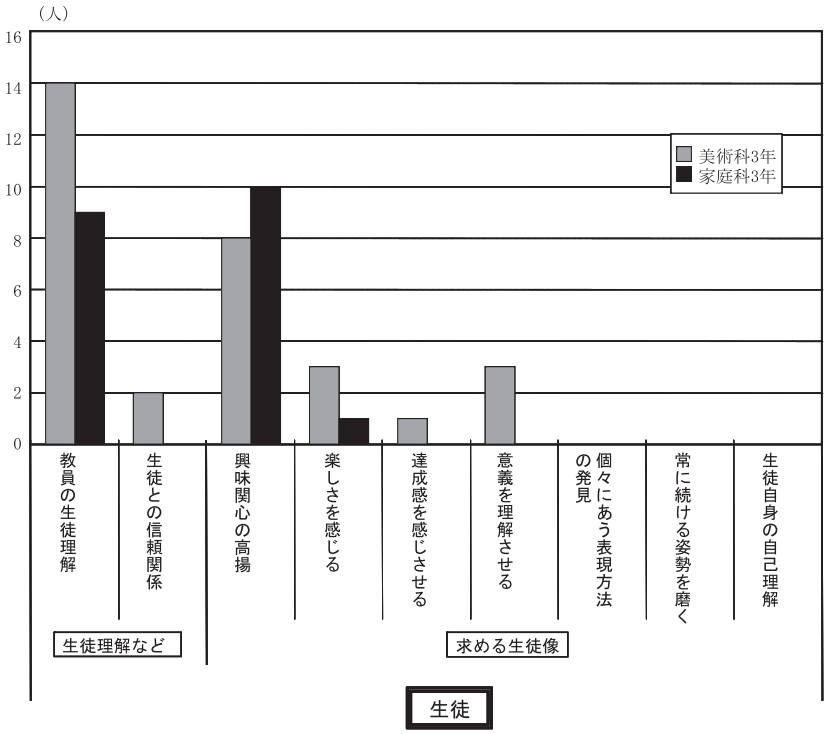

図４-b. 教科充実に求められる工夫（生徒）

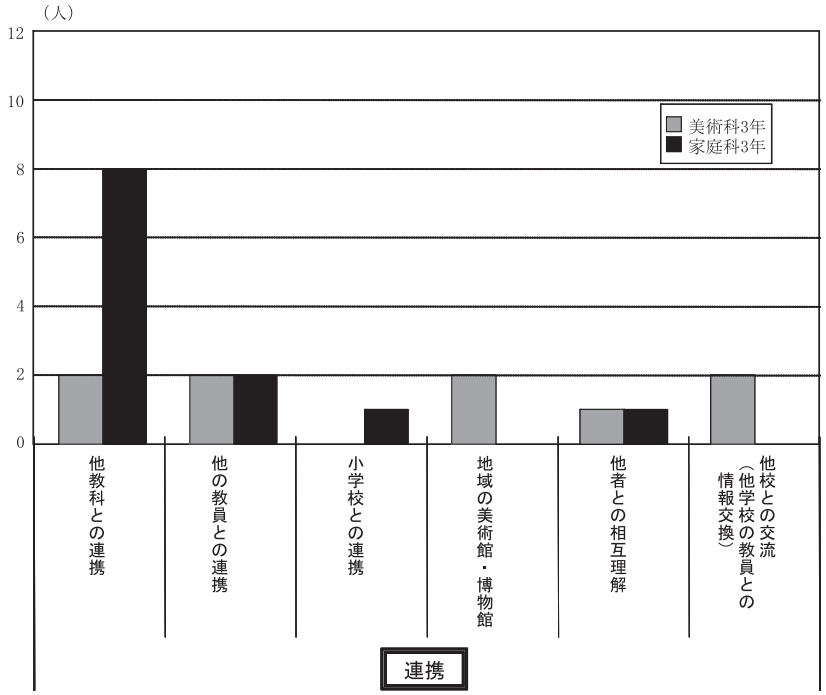

図４-c. 教科充実に求められる工夫（連携）

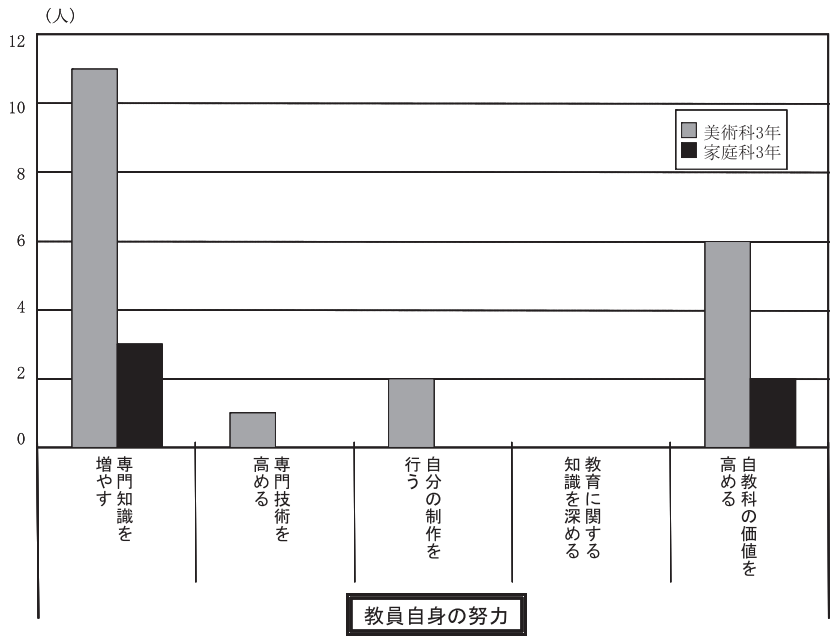

図４-d. 教科充実に求められる工夫（教員自身の努力）

②各学年の回答における特徴

各学年の特徴について，3年間の調査結果を踏襲した図3･4を参照しながら考察していく。先に述べたように，今回は前回の分類をより精査し，授業実践に関わる「内容」「方法」「過程」「評価」の項目を新たに設けた。この分類を用いることで，教科充実のために求められる工夫，つまり授業実践において，学生がどのような項目に着目しているか把握できるようになった。

まず，1年において，美術科では「興味関心の高揚」の項目が最も多く，次いで「授業の工夫」「視覚教材の工夫」「教員の生徒理解」「楽しさを感じる」の順に重要視していた。家庭科では，「実習・作業の増加」の項目が最も多く，次いで「授業の工夫」「生活との繋がり」「興味関心の高揚」「視覚教材の工夫」「教員自身の専門知識を増やす」の順に重要視していた。

次に，3年において，美術科では「教材研究」の項目が最も多く，次いで「生徒理解」「教員自身の専門知識を増やす」「授業の工夫」「興味関心の高揚」の順に重要視していた。家庭科では，「実習･作業の増加」「授業の工夫」が最も多く，次いで「教材研究」「生活との繋がり」「興味関心の高揚」「生徒理解」の順に重要視していた。

これら1・3年の項目を比較すると，両教科を共通して，1年にはなく3年に挙げられている項目には「地域交流（人材活用）」「教材開発」「他の教員との連携」「社会情勢の理解」「驚きと発見のある教材」があった。つまり，前回同様，1年よりも3年の方が，重要視している項目に広がりがあるとともに，それぞれを関連づけて捉えている傾向にあった。3年の方が，教科充実のための授業づくりの構成要素が複合的に関わり合っていることを理解しているといえる。こうした学年毎に生じる捉え方の違いについては，1･2年に比べ，3･4年では大学での講義（実験･実習･演習を含む）や教育実習等を通し，教員としての視点を1年より獲得出来ているためだと考えられる。

③各教科の回答における特徴

先に挙げた各教科で重要視している項目から分析すると，1年において，美術科では生徒理解に関する項目が高い数値を示している反面，授業実践に関する項目が低い数値を示している。美術科では生徒理解を視野に入れているが，その方法が分からない状態にあるといえよう。反対に，家庭科では授業実践に関わる項目が高く，生徒理解に関する項目が低かった。家庭科では，方法にばかり注目し，本来主体であるべき生徒の姿を見失っているといえる。3年において，美術科では生徒理解に関する項目は，1年と同様高い値を示しており，加えて授業実践に関する項目の数値も著しく増加している。一方，家庭科では授業実践に関する項目の数値が高く，生徒理解に関する項目については1年の時からほとんど変化がみられなかった。各教科の回答における特徴として，美術科では生徒理解と授業実践の関わりを重要視してきている傾向にあるが，家庭科では，生徒理解と授業実践の関わりというよりも，授業実践に重きを置いていることが分かる。

また，美術科は，「教員自身の努力」の中で「専門知識を増やす」が高く，家庭科と顕著な相違が見られた。これは先述した将来の進路（図１，２）でも見られたように，専門性の高い職種に就きたいという姿勢の表れと推測される。

さらに，連携に関する項目では，両教科ともにその回答数は少なく，特に1年はその傾向が顕著であった（図3，図4）。また，本研究で焦点を当てている他教科との連携についても，その回答数は少なかった。美術科に比べて，家庭科は若干数値が高かったが，これは現状の授業時間

数を補間するための連携を示しており，体系的な学習を行うための連携を目指したものではないといえる。

(3) 教科連携に求められるもの

上述したように，3年間の調査を踏襲することで，両教科の特徴やその傾向が顕在化し，教科連携の充実のために必要な力を明確化してきた。また，両教科における，連携に対する意識の低さが明らかになった。連携については，学習指導要領においてその重要性が示されているものの，現場教員にもそれは浸透しておらず，学生の意識も同様に低いことが分かった。

本研究では，大学の学校教員養成課程における教科連携のモデルケースを示すことを目的のひとつとしている。しかし3年間の調査を通して，教科連携において必要な事項が新たに見えてきた。それは，単にモデルケースを示すだけでは，不十分であるということである。今回の調査で明らかになった授業実践におけるお互いの教科性や連携に対する意識を，まずは理解することが必要である。しかし，多忙化する現場ではその共通理解は困難であり，学生に関しても，現大学のカリキュラムにおいて，他教科について考える機会が極めて少ない。学生はこうした状況で現場に出なければならず，連携に関して悪循環が繰り返されるだけである。連携とは単なる役割分担ではなく，互いの教科を踏まえながらその課題を把握することから始まる。つまり，連携とは「方法」を学ぶだけではなく，連携の意味を当事者が深く考えることが重要である。教科理解なくして，連携は成立しない。モデルケースを示すことの意義は，両教科がお互いに連携することで，その視点を広げ，力をつけていくことを期待するものである。

4. まとめ

今回得られた3年間の調査結果は，連携の基盤となる教科理解の材料に成り得る。これらのデータは，モデルケース作成時のみならず，授業実施時にも活用していけるものである。特に本稿において，図3・4を図5のようにチャート化した。

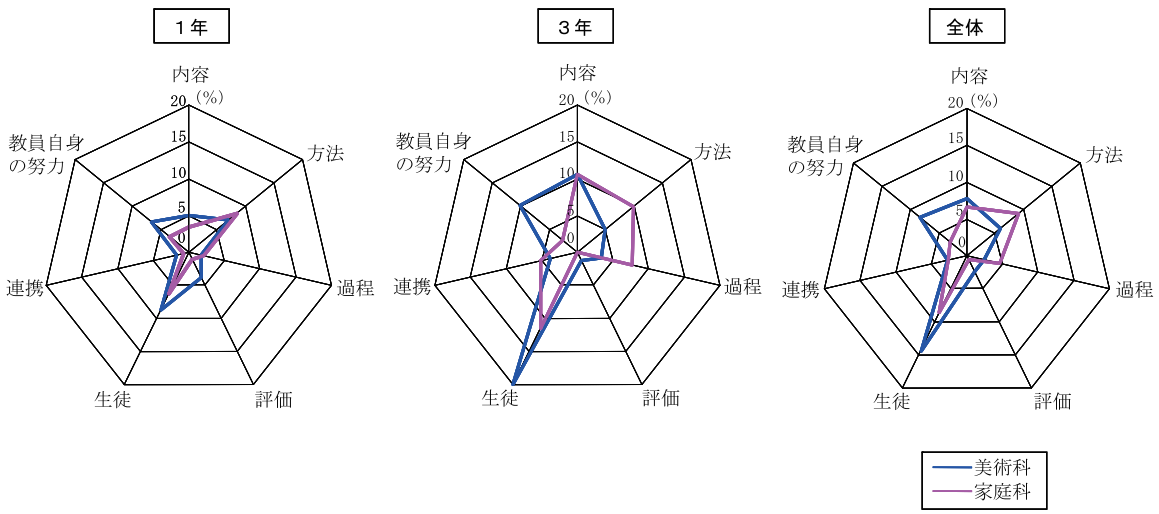

図５　教科充実のために求められる資質のレーダーチャート

このチャートでは，教科充実のために求められる資質を明確化することにより，データを視覚的に読み取りやすくなっており，モデルケース作成時や授業実践において教員および学生が活用しやすくなっている。つまり，このチャートを用いることで，①自教科を振り返る，②他教科の理解を深める，③両教科の比較を行うことが可能となる。さらに，④授業実践における学生の視野の狭小性や偏在性を把握でき，これを参考にすることで，⑤教員側が今後どのような点に着目して学生の力を伸ばしていくべきか判断する手がかりにできる。本年度から「教職実践演習」のために教員および学生が個人カルテの作成を行っているが，本チャートはこうした場面でも活用できると考えられる。また，こうした取り組みが他教科に波及していくことで，連携を実践できる素地が広がるだろう。

今回の調査を活用し，教科連携のモデルケースを示すことで，3つのメリットが考えられる。1つ目は，学生に対するメリットである。つまり，学生が連携の意義を考え，実際にその方法を学び，現場でそれを活かして更なる実践を重ねることができるということである。2つ目は，現場の教員に対するメリットである。本研究でモデルケースを示すことで直接的にその方法を習得するとともに，連携のあり方を学んだ学生が現場に立つことで間接的に連携に対して自分の考え方やあり方を見直すきっかけになる。3つ目は，大学に対するメリットである。現場での教科連携を見据えた大学の既存カリキュラムの見直しができると考えられる。

本稿では，前回の調査を踏まえ3年間のデータを考察し，両教科の特徴やその傾向を顕在化させ，教科連携の充実のために必要な力を明確化してきた。また，モデルケース作成や授業実践に必要なチャートの作成を行った。今後は，この考察結果を基に，両教科が連携したモデルケースを計画・実施していく予定である。

註

1）文部科学省，「小学校学習指導要領」，平成20年７月25日，pp. 15-16.

2）文部科学省，「中学校学習指導要領」，平成20年８月20日，pp. 18-19.

3）村上陽子・寺田拓也「中学校『技術・家庭』における連携の実態調査－静岡市内公立中学校の場合－」，静岡大学教育実践総合センター紀要，No. 16，2008，pp. 1 -10.

4）髙橋智子･村上陽子「学校教員養成課程における教科連携による授業実践の試みno. 1 －教科充実に対する大学生の意識調査－」，静岡大学教育学部研究報告教科教育学篇，第41号，2010，pp. 211-218.

5）内田・横出は，以下の論文で，学生が理解している造形・美術教育の内容を，教育目標と教育実践の視点から整理し，マトリックスを作成している。この論文を参考にして，今回教育実践を４つの要素に分類した。内田裕子　横出正紀「造形・美術教育教員養成課程における教科教育カリキュラム構造の研究」『大分大学教育福祉科学部紀要』24（２），2002，pp. 395-403.